

秋田県藤里町における国内研修の成果報告書

今回の秋田県藤里町における三日間の研修では藤里町社会福祉協議会の職員の皆さんにご協力を頂きながら藤里の各施設の視察、またその施設での利用者の方々と実際に交流させて頂いたり、地域の方々との交流をさせて頂いた。非常に多くのことを勉強させて頂くうちに、何故藤里町は高齢化が進んでいるにも関わらず、住民の皆さんがとても元気で、明るく生活を送っているのだろうと疑問を持った。

結論から言うと、これは藤里の充実した福祉政策、藤里を活性化しようという気概が行政から住民にまで浸透し、人々が活気づく結果となったのではないかと思われる。

藤里町は特に高齢者に向けた福祉政策が充実している。それは昔からのことではなくここ最近のことである。今回さまざまな人とお話しした中で、幾度となく「社協さんが〇〇してくれるから～」や、「社協さんのおかげでこういうイベントがあって楽しいのよ」などと言ったお話をよく聞くことが多かった。これは驚くべきことである。いったい自分の暮らしている地域で社会福祉協議会がどこにあるのか、または何をしているのかということ把握している人はどのくらいいるのだろうか。少なくとも私は自分の地域の社会福祉協議会がどこにあるのか、どのような取り組みをしているのかということに咄嗟に言うことはできない。このことからいかに藤里の社会福祉協議会が地域に根付き、その取り組みを地域の人々が理解し、認められているのかということが分かった。

また、わたしたちが藤里に入り、活動する上で常に世話を焼いてくれたり、住民の皆さんとの交流を築いてくださったのは全て社協の皆さんの協力によるところが大きかった。住民の皆さんが快くわたしたちを受け入れて下さったのは社協と住民の深い信頼関係も影響しているのではないかと思われる。

だがある意味このような信頼関係、地域に根付いた行政が成立するのは、誤解を招くような言い方にはなってしまうが、藤里町がちいさな片田舎の町であるから、といったことも要因のひとつではないかと考えられる。実際同じような取り組みを行おうとしても東京などの大都市では成功しないだろう。同じくらいの土地の中に藤里の何倍もの人がひしめき合い、マンションなどが乱立し、隣人の顔さえも分からない東京と、隣人の顔や名前はおろか、その人の人となりまで全て把握できてしまうような藤里。この違いを認識し、わたしたちが住む地域ではどのような活動が最適なのか、地域の人々どうしの結びつき、行政の地域に対する介入の方法などに関して、改めて考えさせられる結果となった。

もうひとつ、今回活動を続けるうちに藤里町の地域においてわたしたちがどれほどまでに大切にされ、愛されているかということが分かった。

私が所属するサークルでは夏と冬、毎年2回ずつ藤里に訪問させて頂いている。今年はその11年目となり、町での認知度はとても高くなってきているように感じた。お話しさせて頂いた人のなかにも「孫が来るのと同じくらい楽しみ。」と言ってくださったり、普段は朝市に買い物に出ているのにわたしたちが来るからと言って部屋で待っていてくださった人もいて、半年に1回だけの訪問だけだが、とても役に立っていることを感じ、それとともに藤里に居場所があるように思え、とても有意義な時間を過ごすことができた。

よくボランティア活動などと銘打って、地方に赴き、地域の住民と交流したり、農作業を手伝ったりするような活動はあちこちで見られている。だがそういったものの中には1回こっきり、ちょっと興味があるから行ってみた、友だちに誘われなんとなく、夏休みの課題などで、といったように単発で行われ、その後またそこに継続して赴くといった長期的なプロジェクトはなかなかないように思われる。確かにその期間、その地域の人々は助かっている。感謝もしているだろう。だがいつまでたってもそれでは、住民においてボランティアはただの「よそ者」でしかないのではないか。外部から来た人間がその地域になじみ、受け入れられることはとても難しい。特に田舎となれば、悪く言ってしまうと閉鎖的な要素を持った人同士のつながりの強さが枷となってくる。そのような状況が考え得る中で粘り強く、継続して藤里町に来ることで、恐らく藤里の地域の人々がはじめ持っていたであろうわたしたちに対する「よそ者」という印象を徐々に捨てだし、「休み毎に来てくれる孫たち」といった印象に変化させていくのだと感じた。私自身においても、「冬にも来ていたよね？」などと言ってくれた人がいらっしやり、とても嬉しく思うとともに継続してくることの大切さを、身をもって学ぶことができた。

このように、継続して同じ地域でボランティアをすることは地域住民、ボランティア双方の結びつきを強くし、信頼関係を深め、非常に効果のあるものだということが分かったが、他にも継続してその地域に赴くことで得られるものがあるということを学んだ。

それは、「変化」である。今回は冬にも訪問させて頂いた施設と同じところを訪問させて頂いたのだが、冬に来たときとは変わっていたことや人がいくつかあった。簡単なもので言えばまず景色が違う。夏なのである、当然と言えば当然だが、町を歩いている人の数が多かったり、農作業をしたり、よりアクティブに人々が動いていた。

また、わたしたちが訪問した期間の一週間後には藤里町の中でとても重要視される大きな祭り、浅間神社祭典・藤琴駒踊りが控えていた。開催される日はなんと学校も休みになる非常に大きな祭りである。藤里の人々は練習や準備に勤しみ、なんだかそわそわした空気が漂っていた。祭りのことも詳しく教えて下さり、町全体が冬よりもとても

活気づいていたように感じられた。こういった変化は来てみないとわからなかったことであり、藤里をリアルに体感できたように思う。

今回、たくさんの方のことを学び、体験させて頂き、現場に出ていくことの大切さをより実感した。継続してくることでその地域の良い面、悪い面や変化したことなど、1回来ただけではわからないようなことも学べ、非常に充実した研修ができた。これから先、大都市のなかで生活していく私はいったい何を生かせるだろうか。まだまだ未知数なところも多い。だがしかし、そんな都市の中でも近年、人々の結びつきが希薄になり、地域といった概念が消えつつあることをようやく都市に住む人々は認識しだしたように感じる。藤里の取り組みをそのままぞっていきことはできないが、藤里で見ることのできた人々の信頼関係、結びつきをわたしたちはもっと学んでいくべきだ。そしてそこから都市ならではの人々の関わり合いのかたちを見つけ出していくことができれば、それはよりよい地域づくりになるのではないだろうか。(2812字)